

挙げている為の措置とも考えられるが、全ての官職について兩制が残されているわけではない。これでは丁宗臣の場合のように、略伝中の最終官と墓誌題名との間に喰違いがあったとしても往々に見落されてしまう恐れがある。兩制等をもあけて官蹟を跡づけんとした努力に加えて面倒ながら墓誌等も正確な題名を載せてはしなかった。丁宗臣の「尚書都官員外郎」なる最終官は贈官かもしれないので、文恭集にあたってみると「……遷秘書丞、三司準知舒州太湖県兼樞密……考課遷太常寺博士、汎恩除尚書屯田員外郎、在官五年代遷進秩中都通判定州、暴中風眩以至含壁……」とある。中都は中都官、この場合都官員外郎を指すのであろう。太常博士↓屯田員外郎↓都官員外郎のコースは常調（通常の昇進ルート）なのである（宋史一五八選舉志四銓法、遷秩之制）。丁宗臣の略伝中に通判定州をあげる以上はやはり「官至都官員外郎」となすべきである。こうみてくると『宋人伝記索引』が墓誌銘等の題名を省略せず採録してあるのは捨てがたいのである。残る名の不明な丁姓のうち一人は本書第一冊、一四頁で丁昌期の祖父なることが明らかにされているが、もう一人の江湖長翁集所載の丁君墓誌銘については本書の丁姓の個所には記載がないようである。名字の不明なものについて『宋人伝記索引』は不明なまゝ挙げているが、本書はそれをどう扱っているのか必ずしも明らかでない。字の判る者についてはそれを見出

しとしている例を見出すが、これが一般的なのか否かも不明である。しかし以上は強いて捜し求めた欠点であって、本書が伝記資料の集大成として持つ値打をいささかもそこなうものではない。本書は単に索引として利用せられるだけでなく、常時、それぞれの立場から利用せられて新たな問題を提起しうることも可能なように思える。なぜなら通り一遍の官蹟或は事蹟の記載、繰り返される常套語も、それが積み重ねられてみると相当の重みをもってくるように感ぜられるからである。ともかく本書は宋代史研究のために利用度の高い文献となることであろう。（全六冊附字号索引、鼎文書局、民国六十三年〜六十五年）

L・C・グドリッチ、房兆楹編

明代名人伝 一三六八—一六四四（上・下）

山根幸夫

今般、コロンビア大学プレスから、L・C・グドリッチ教授主編、房兆楹氏協編で Dictionary of Ming Biography 一三六八—一六四四（明代名人伝）が刊行されたことは、さきに一九四三—四四年に出版された Eminent Chinese of the Ch'ing Period 一六四四—一九一二（清代名人伝略）に次ぐ快挙というべきであろう。本書の出現によって、我々はもっ

とも正確にして、かつ詳細な明代伝記辞典をもつことになり、それは単に明代史研究者のみならず、中国史研究者全体を裨益するところ実に多大である。

さて本書編纂の計画が生れたのは、グドリッチ教授も序文に述べられているように、一九五八年のことであつた。実は同年夏、東洋文庫の和田清先生のもとに Fairbank 教授より協力の要請があつたことを、筆者も和田先生よりうかがい、明人伝記辞典の計画をした。翌五九年秋、この事業を進めるための基礎作業として、日本人・中国人の明代史研究に関する文献目録の作製が委嘱され、筆者は和田先生の命により、この目録作製に従事し、一九六〇年末に『明代史研究文献目録』として完成した。その間、京都の人文科学研究所に留学中であつたド・ヴァリ教授とも接触をもち、目録編纂に関する詳細な打ち合わせをした。付言すれば、本書の編纂に當つて、グドリッチ教授を助けて、全体の運営にあたられたド・ヴァリ教授の功績も見逃すことはできない。

なお、一九六三年には専ら本書編纂にたずさわるため、当時オーストラリアに在った房兆楹氏が夫人杜聯誥女史とともにコロンビア大学に招聘された。渡米の途中、東洋文庫にたちよられ、和田先生とともにお目にかかった記憶がある。

筆者の『明代史研究文献目録』につづき、やはり伝記辞典編纂のための基礎作業として、多くの索引類が作られた。台

湾の国立中央図書館では『明人伝記資料索引』上・下（一九六五・六六）が刊行された。また、京大人文科学研究所では、天下の孤本『皇明文海』（旧細川侯爵家蔵）のネガ・フィルムを提供するとともに、同書の人名索引を編纂した。香港新亞書院の牟潤孫氏は『古今圖書集成中明人伝記索引』を編纂した。W・ فرانケ教授の "An Introduction to the Sources of Ming History"（明代史籍彙考）もまた、本書編纂の協力作業の一環であつたらしい。さらに筆者は、当時国際基督教大学の客員教授として来日中であつたグドリッチ博士の要請に基づき、『日本現存明代地方志伝記索引稿』の編纂に従い、一九六四年一月に油印本で刊行した。

このように本書の編纂に先だつて、その基礎作業として、多数の研究者が協力して、各種の目録や索引類を編纂したことは、それだけ本書の編纂作業を容易にしたのではなからうか。この点はさきの『清代名人伝略』の編纂の場合と大きく異なる点である。このような基礎作業について色々氣をくばられたのは、主編者たるグドリッチ教授の配慮によるもののである。

さて、本書には約六五〇名の明人の伝記が収められている。勿論、それは中国人のみに限らず、明と関係のあつた日本人、朝鮮人、モンゴル人、チベット人、越南人なども含まれている。また、明末に多数来華した宣教師たちの伝記も三十名ち

かく収められている。例えば、アダム・シャルル、マテオ・リッチ、G・アレニイ、S・ウルシス、A・セメド、J・テレンツなど著名な宣教師の伝記は網羅されている。

さて、辞典の常として、各項目のランク付けが大きな問題になるが、本書でも詳細なものは十数頁にのぼり、簡単なものは一頁足らずである。このランク付けが適当であるか否かについては、かなり異論もあるうが、概して『清代名人伝略』の場合よりも、叙述が詳しくなっている傾向はみられる。次に、明代の各皇帝について、どれだけのスペースが割りあてられているか表示してみよう（但し、光宗泰昌帝以下は『清代名人伝略』に収められているので省かれている。すなわち、『清代名人伝略』に収録された人物は、本書に含まないという原則である）。

皇帝	頁数
太祖	12p.
成祖	8p.
仁宗	11p.
宣宗	3p.
宗宗	11p.
景帝	6p.
憲宗	5p.
孝宗	7p.
武宗	5p.
世宗	9p.
穆宗	8p.
神宗	3p.
	15p.

右表のように、歴代皇帝のなかでは神宗万曆帝に一五頁がさかれて、最も多く、仁宗、穆宗が三頁で最も少い。ただ、我々の眼からみれば、世宗よりも武宗により多くのスペースがさかれている点など、問題がないわけではない。それから、各項目ごとに詳細なビブリオグラフィが付されていること

は、読者にとって大変便利である。『清代名人伝略』の場合よりも、参考文献のあげ方は詳しくなっている。ただし、参考文献の示し方は、執筆者によって、かなり繁簡の差があること、更にいえば日本語の文献が比較的無視されていることが気になる。

例えば、張居正の項では、鈴木正「張居正の研究」（史観四九）など挙げられて然るべきではなからうか。なお、朱東潤の『張居正大伝』はあがっているが、陳翊林「張居正評伝」がおちているのは、どういうわけであらうか。勿論、これはほんの一例を示したにすぎない。

それから、本書に収録されている日本人は、小西行長、了庵桂栖、雪舟等揚、絶海中津の四名にすぎない。例えば『入明記』の著者である策彦周良などは、収録されて当然ではないだらうか。一五三九年、一五四七年の二回にわたって、最初は副使、次には正使として渡明しており、中国との関係からみれば、雪舟の場合よりはるかに密接だったはずである。勿論、それも本書にとっては瑕疵にすぎない。

次に本書の執筆陣であるが、全部で一二五名の多数にのぼっている。しかも、その半数以上の六五名は中国人（韓国人でソウル大学教授闘基氏を含む）で占めていることも注目すべきであらう。なお、これらの中国人研究者はほとんど海外で活躍している人たちである。本書の協編者としてグドリ

ツチ教授を助けられた房兆楹氏は、前の『清代名人伝略』の執筆にも参加しておられたが、今回も夫人杜聯誥女史とともに、相当多くの項目を執筆されたようである。筆者の知人としても、呉縉華氏や秦家懿女史の名前がみられる。

西洋人でも主編者グドリッチ教授以下、さきの『清代名人伝略』の編者であったハンメル氏の名前もみえており、『明代史籍彙考』の著者であるW・フランケ教授も加わっている。このような大家と並んで、若い研究者も多数執筆しているようである。

それ故、中国人にしろ、西洋人にしろ、すべてが明代史の専門家というわけではない。一二五名の明代史専門家を集めることは、到底不可能なことであるから、やむをえないことであろう。各執筆者とも個々の人物について詳細に調査して、まとめられているので、その点に関しては問題はないが、その人物を明代史の上でどう位置づけるかについては、やや物足りない点もあるのではなからうか。

『清代名人伝略』が、各項ごとに『三十三種清代伝記綜合引得』に拠って典拠を明かにしたように、本書では『八十九種明代伝記綜合引得』所収の各書に伝記のあるものは、その所在を明記している。八十九種の各書をこのように利用するのであれば、『皇明文海』や『古今圖書集成』の巻数も、これに準じて表記された方が便利だったのではあるまいか。

以上の他、『清代名人伝略』と異なる点として、歴代皇帝および皇后の肖像画を載せているのは、なかなか面白い試みである。これらの肖像画の大部分は台北の故宮博物院に所蔵されているものであるが、太祖洪武帝の死去の前年ころの肖像画は、グドリッチ教授の蒐集品にかかるという。

この肖像画の他に数葉の地図も掲載されている。これも又読者の利用の便宜をはかるために付加されたものであろう。

①明代の中国（行政区分図）②十五世紀のアジア（明代国際交通路）③明代北方边境図（十六世紀の九边鎮）④十六世紀日本の中国大陸との対決図（倭寇の活動）

最後に、巻末には索引が付されており、人名索引、書名索引があるのは当然であるが、それ以外に件名索引がつけられていることは注目に価する。例えば、日本、朝鮮、安南、モンゴルの如き国名、詩人、宦官といったいわば職業、北京、南京などの地名、その他に科挙、儒教、道教あるいは大運河といった件名も設けられている。この件名索引をうまく利用することによって、本書の利用価値は一層ひろまるであらう。

以上、筆者は本書について多少の不満をも述べたが、それらは本書全体からみれば些細なものにすぎない。最初に指摘したように、本書が学界に提供されたことは、中国史研究者を裨益すること実に多大である。本書を世に出すために絶大なる努力を払われたグドリッチ教授および房兆楹氏に対して

深甚なる敬意を表する次第である。

(L. Carrington Goodrich (editor), Chaoying Fang (associate editor): Dictionary of Ming Biography 1368—1644, 2 vols., The Ming Biographical History Project of the Association for Asian Studies. New York & London, 1976, xxvi, 1751 pp.)

李光濤編

明清史料癸編

神 田 信 夫

私は曾つて『明清史料の続刊』(『駿台史学』第八号所載 一九五八年)と題する一文を草し、戦後台湾に遷った中央研究院の歴史語言研究所において『明清史料』の戊編と己編が新たに編輯刊行されたことを紹介すると共に、それに先立ち中国科学院編輯として丁編が刊行されていることにも触れた。

丁編の編輯が中国科学院の名になっているのは、既に上海の商務印書館で印刷に附され完成しかけていたのを中華人民共和国に接収されたからである。従つて実際の編輯は丙編までと同じく中央研究院の歴史語言研究所であり、書物の体裁も扉と奥付の外は異なるところがない。戊編は一九五三年三月から翌年八月まで約一年半にわたつて十冊が刊行され、己編は

五十七年六月に第一本から第六本までの六冊、ついで翌年四月に第七本から第十本までの四冊が刊行された。その後、一九六〇年四月から十二月にかけて庚編十冊、六二年六月に辛編十冊、六七年四月に壬編十冊の刊行をみた。もつともこの年月は扉や奥付にみえるもので、壬編の末尾に李光濤氏が記されている謝辞には「(中華民國)五十六年(一九六七)九月十四日」の日附があるから、壬編が実際に刊行されたのはやや遅れたのかも知れないが、ともかく爾後八年を経て一九七五年八月に至り、癸編十冊が新たに完成したのである。

『明清史料』は言うまでもなく、中央研究院に所蔵されている、清の内閣大庫にあつた檔案を整理編輯して鉛印に附し、線装本十冊ずつを一編として刊行したもので、各編には十千の字号が冠されている。一九三〇年九月に初めて甲編の第一本が発刊されたが、このたび癸編全十冊が刊行されたので、甲編から癸編まですべて百冊が完成したわけで、まことに慶賀に堪えない次第である。

中央研究院が内閣大庫の明清檔案を入手するまでには、いろいろ紆余曲折があつたが、ともかく一九二九年に北京の午門の西翼楼上においてその整理が開始されることになった。爾来、今日まで既に半世紀にちかい。いったい内閣大庫の檔案が外部に流出し、その一部が中央研究院の所有に帰した経緯や、北京でその整理が開始された当初の情況などについて